

持久的誘引餌を用いた新規捕獲手法の実証試験について（経過報告）

1. 実証試験の目的

個体数調整により保護管理計画の目標生息密度に達した後、その生息密度を維持するため、継続的に一定頭数を捕獲し続ける必要がある。特に、ニホンジカの生息密度が低い場合には、捕獲数に対する作業労力は多くなることが予想されるため、効率的な捕獲方法が必要となる。AI センサー付き囲いわなとともに用いることを想定した持久的誘引餌^{*}を使用することにより作業労力の軽減を目指す。

持久的誘引餌は、ニホンジカが効率よく採食できない構造にすることにより、食べきるまでに日数を要し長時間個体を滞在させることができる、給餌の手間を減らすことができるといったメリットがある。

<持久的誘引餌の作成方法>

ハイキューブ約 5kg に対し、溶解したグラニュー糖約 5kg を混ぜブロック状にした。無臭であるグラニュー糖は、融点（170～180℃）以上で溶解又は加水して溶解すると変性を起こし臭気を発するため、変性を起こさないよう留意し溶解を行った。

^{*}ハイキューブ（図 1）をグラニュー糖により固めたブロック状の餌（図 2）



図 1 ハイキューブ



図 2 グラニュー糖により固めた
ブロック状の餌

2. 平成 23（2011）年度の課題と平成 24（2012）年度の試験内容

平成 23（2011）年度の実証試験では、持久的誘引餌の耐久性を確認することができたがツキノワグマ等による誘引状況の確認について設置回数が少なく確認するまでには至っていない。平成 24（2012）年度はより長期にわたり実証試験を行いツキノワグマ等へ誘引状況について検証を行う。

4. 経過報告

誘引種確認結果を図4、図5に示した。

1回目の持久的誘引餌設置後、ニホンジカ以外で確認された哺乳類はテンのみであった(図4)。設置後4日目には持久的誘引餌は完食されカメラの回収を行った5月11日までの間に撮影された哺乳類の種はなかった。これは4月22日～24日に装薬銃による個体数調整を行ったことによる影響があったものと考えられる。

2回目の持久的誘引餌設置後、ニホンジカ以外で確認された哺乳類はキツネ、テンであった(図5)。設置後、8日目(5月19日)に確認用の赤外線カメラの画角外に持久的誘引餌が移動したため、ニホンジカは確認できたが、完食を確認することはできなかった。

最後に撮影された6月2日以降カメラを回収した7月18日の間に撮影された哺乳類の種はなかった。

3回目は8月18日にカメラを回収し現在解析を進めている。なお、本試験はツキノワグマの行動が広範囲になる秋に4回目を実施する予定である。

5. 傾向と問題点

本年度の2回の試験では、ツキノワグマは撮影されなかった。

考えられる理由として、以下の2点が挙げられる。

- ① ツキノワグマが持久的誘引餌に遭遇するほどに餌の持久性はなく、ツキノワグマが持久的誘引餌に遭遇する前にニホンジカが完食した。
- ② 低密度で生息するツキノワグマを引き寄せるほどの誘引性はなかった。

ツキノワグマの行動が広範囲になる秋まで試験を継続する事により再確認する。

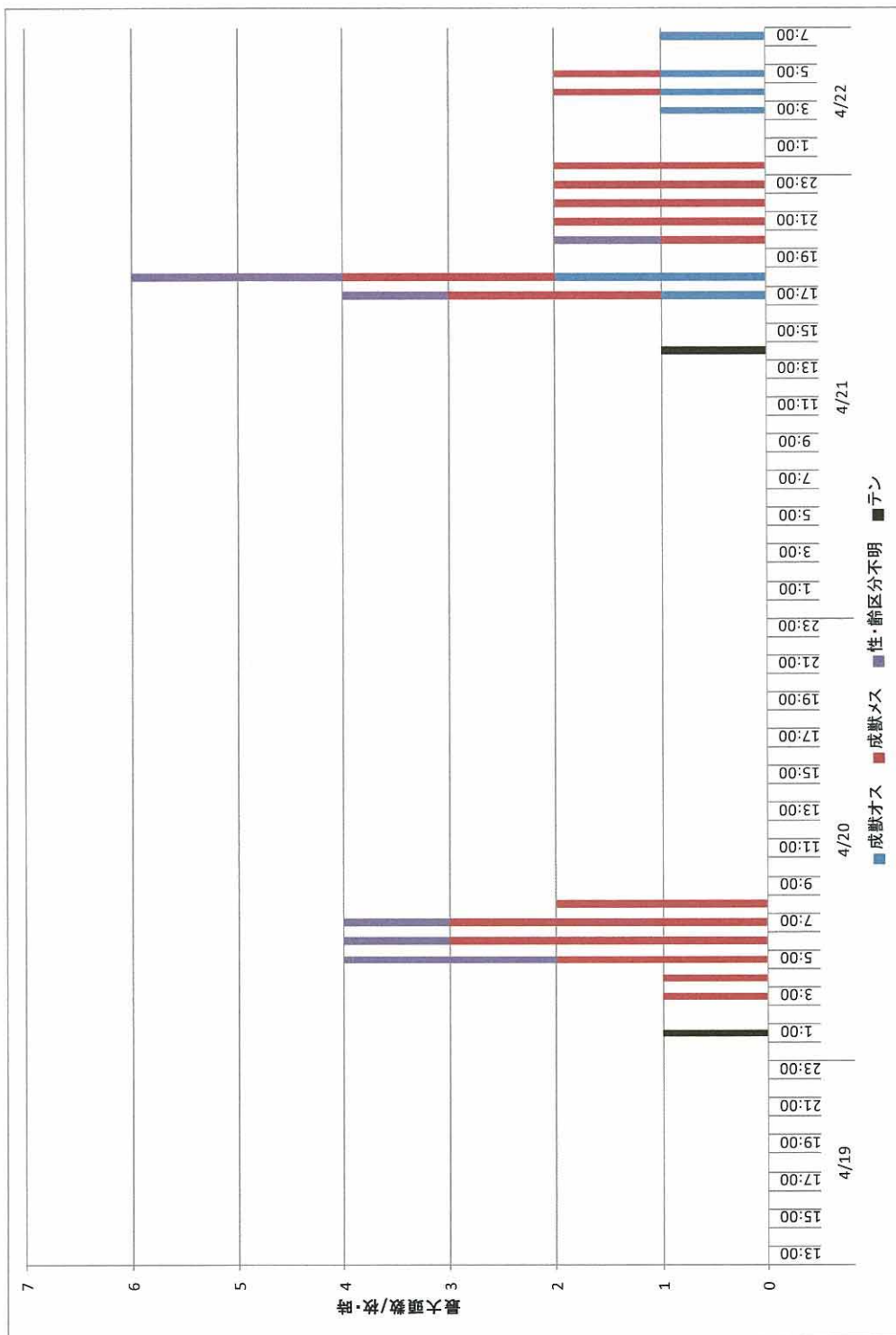


図 4 1 回目 (4 月) の確認状況 (成獣、性・年齢区分不明はニホンジカ)

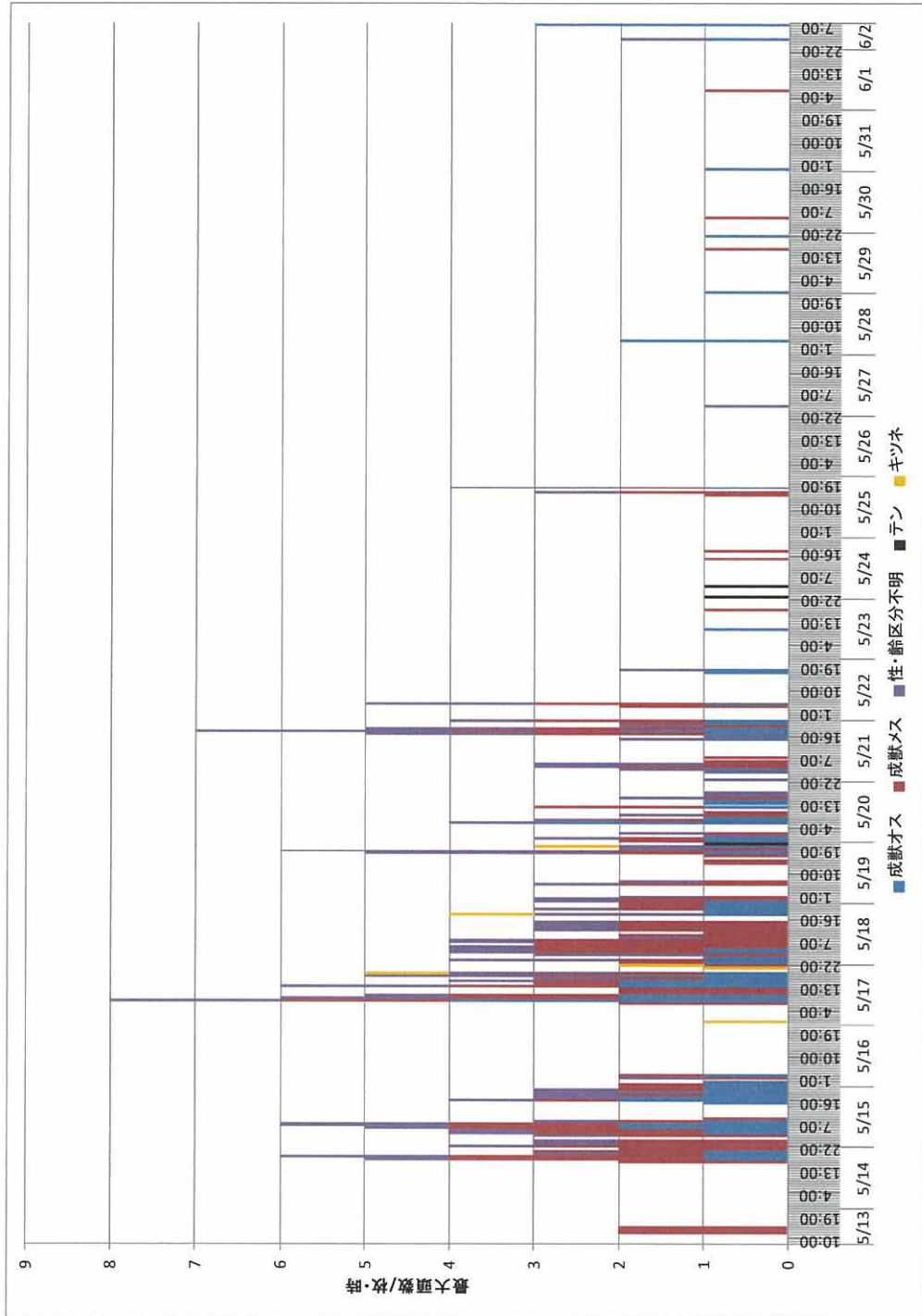


図5 2回目(5月)の確認状況(成獣、性・年齢区分不明はニホンジカ)